

【資料 1】

The Individual Psychology of Alfred Adler p352

We do not believe that all early recollections are correct records of actual facts. Many are even fancied, and most perhaps are changed or distorted at a time later than that in which the events are supposed to have occurred; but this does not diminish their significance. What is altered or imagined is also expressive of the patient's goal, and although there is a difference between the work of fantasy and that of memory, we can safely make use of both by relating them to our knowledge of other factors. Their worth and meaning, however, cannot be rightly estimated until we relate them to the total style of life of the individual in question, and recognize their unity with his main line of striving towards a goal of superiority.

私たちは、全ての早期回想が実際のできごとの正確な記録であるとは信じていない。多くは想像されたものですらあり、たぶん多くは、それらのできごとが起こったであろうと想定される時より後に、変わったり、ゆがめられたりしている。しかし、このことは、早期回想の重要性を減らすものではない。変えられたり想像されたものもまた、その患者の目標の表現なのであり、想像の産物と記憶のそれには違いがあるけれども、私たちは、その両方を、他の要因に関する私たちの知識に関連づけることによって、安全に利用することができる。しかしながら、早期回想の価値と意味合いは、私たちがそれらを、問題となっている個人のライフスタイル全体に関連させ、その人の優越目標への主要な方向とともに、それらの統一性を認識するまで、正當に評価できないのである。

【資料 2】

R. Dreikurs

“Fundamentals of Adlerian Psychology” より (p86)

The earliest memories of his childhood and his dreams are excellent means to unveil the life style although it is difficult to interpret one's own dreams. They show the direction in which he tends to go. The earliest memories of childhood are always significant. They record experiences which are in line with a person's basic and

characteristic attitude, and there can be no doubt that each individual tries to justify his attitude by looking back to those experiences. It often happens that if treatment succeeds in changing the patient's outlook, experiences he had kept in mind till then are forgotten and others which he had not been able to bring to mind take their place. All memories serve to justify a definite line of conduct which is being pursued at the time or has been planned for the future. The human being is constantly drawing on his memories for fresh strength to persist in a course once chosen. ¹

もし治療がその患者の見解を変えることに成功すれば、その人が心の中にしまいこんでいてそれまで忘れていた経験や、意識にのぼらせることができなかつた他のものが、一定の位置を占めるということが、しばしば起きる。全ての記憶は、その時、あるいは計画されている将来に向けて追求されている、行動の明らかな方向を正当化することを助けている。人間は、自分がいったん選んだ道すじを持続するために、新たな力を得ることへ向けて、常に自分の記憶に書きこみをしている。

1 The memory records all experiences. They are kept, so to say, on file for future reference. In this way they do not interfere with present problems and experiences; but they can always be recalled when we want and need them.

記憶は全ての経験を記録している。それらは、いわば、将来の参考のためにファイルにしまわれている。このようなやり方で、全ての経験は、現在の問題と経験に干渉することはないが、私たちがそれらを欲し必要とするときには、いつでも思い出すことができる。

【資料 3】

H.Shulman, H.Mosak

“Manual for Life Style Assessment” より (p61-62)

Although Munroe (1955) stated that Adler was the first to use early recollections as a projective technique, that is probably not true. Freud (1959) also used them that way, although with an entirely different emphasis as Ansbacher (1967) has pointed out. Freud emphasized that which was forgotten rather than that which was recalled and he viewed many early memories as “screens” behind which were important repressed events.

マンローは、早期回想を投影法として使ったのはアドラーが最初であると論じているが、それはたぶん事実ではない。アンスバッハーが指摘したように、全く異なる重点の置き方であるが、フロイトもまた、投影法として早期回想を使った。フロイトは、思い出したものよりも忘れていたものに重点を置き、多くの早期記憶を、重要な抑圧されたできごとの背後にあるスクリーンのようなものであるとみなした。

* ルース・マンロー (Ruth L. Munroe, 1903-1963、アメリカの心理学者・心理分析家、『精神分析的思考の諸学派 (Schools of Psychoanalytic Thought)』1955 年)

* 投影法

曖昧な刺激 (絵、言葉、インクのしみなど) に対する個人の自由な反応を通じて、無意識の感情、動機、パーソナリティを明らかにする心理的・マーケティング調査手法。ロールシャッハ・テストや TAT (主題統覚検査) が代表的で、直接的な質問では得られない本音や深層心理を探るのに有効。

For Adler, the most important information in a memory was what was **expressed**, not what was **repressed**. Memory thus was highly selective and early recollections were selected from a vast number of experiences to be remembered because they contained adaptively useful information for the remembering individual.

アドラーにとっては、記憶における最も重要な情報は**表現されたもの**であり、**抑圧されたもの**ではなかった。

【資料 4】

野田俊作補正項 2016/2/17

科学と擬似科学の違いのひとつは、「観察できる事象」から出発するかしないかだ。アドラーは、臨床心理学における「観察できる事象」として「エピソード」に注目した。たぶんアドラーは、最初は子ども時代のエピソードである早期回想に注目し、そこから次第に現在の生活の中でエピソードに注目するようになったのだと思う。エピソードに注目した結果、アドラー心理学は目的論でありながら科学的であることができている。逆に言うと、いくらアドラー心理学の理論にもとづいていても、エピソード以外のものから出発して考えると、科学的でなくなってしまう。

2011/12/29

西洋人は、気の毒にも、神話とのつながりを失ってしまった。先進国で神話とつながりを保っているのは日本人だけであり、そのことをわれわれは誇りにすべきだし、大切に子孫に伝えていくべきだ。神話とは、民族の早期回想であり、その中に現在の問題を解くヒントがすべて含まれている。困ったときは神話にかえって考えると、きっと答えが見つかるはずだ。ここで《神話》といているのは、『古事記』や『日本書紀』だけでなく、民族の精神について日本人が伝承してきたさまざまな物語の全体をいっている。日本人は、そこに遡って問題解決を考えることができる。

野田俊作論文集

心理学における創造性と土着性（1993年4月アドレリアン掲載）

創造的思想が文化の価値観を批判するとき、それへの反動として、文化が本来持っていた価値観を擁護するための思想が形成されてきます。これを土着思想と呼ぶことにします。土着思想は、批判の拒否ですから、「考えることをやめて、現状をそのまま受容せよ」と主張します。これが土着思想の基本的メッセージです。

土着思想の例として、たとえば、神道の思想をあげることができるでしょう。古代日本の文化的自明性が言語化されたものが神道ですが、これは仏教という外来の思想に触れてはじめて思想化されました。仏教が批判的創造的な役割を果たした時代があったのです。神道は、日本古来の価値観を反映していると思われませんが、歴史的に見れば、仏教への反動としてはじめて言語化されたものです。